



Title	死海文書から見えてくるキリスト教：反ユダヤ主義とパレスチナ問題
Author(s)	上村， 静
Description	日本基督教学会北海道支部2024年度公開シンポジウム「死海文書とキリスト教」． 2024年7月15日．
Citation	日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録， 6， 89-121
Issue Date	2025-07-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95828
Type	conference paper
File Information	jscsh_006_89.pdf



死海文書から見えてくるキリスト教 ——反ユダヤ主義とパレスチナ問題——

上村 静

はじめに

2023 年 10 月以来のハマスによるイスラエルへの攻撃とイスラエルによるガザ地区への反撃は、いまだその終わりを見通すことができない。ハマスによるイスラエルの民間人への攻撃はもちろん容認できるものではないが、さりとてイスラエル軍による膨大な数の民間人を巻き込む過剰なまでの攻撃も——それはガザ地区にとどまらずヨルダン川西岸地区、レバノン、シリア、イランへと飛び火している——、到底容認できるものではないし、今なおイスラエルに支援を続ける欧米諸国のあり様も異常という外はない。こうした悲しい現実の背後には、ユダヤ系イスラエル人のナショナリズムと世界への強い不信感がある。そこにはキリスト教世界における長い反ユダヤ主義の歴史が横たわっている。キリスト教の反ユダヤ主義の根源には、今なお克服できずにいるキリスト教のセクト体質があるように思われる。たしかにキリスト教は世界中に多くの信者を抱えているという意味で世界宗教になったと言えるが、必ずしも「普遍的宗教」になったとは言えない。そうしたキリスト教のセクト体質は、キリスト教の生まれたセクトの時代（前 3 世紀～後 2 世紀前半）のユダヤ教に由来するものであり、死海文書と新約聖書はその時代のユダヤ教のものの考え方を映し出していると言える。

本稿では、死海文書の全体を紹介し、セクトの時代がどのように生まれ、どのような特徴を有しているのかを概観してから、死海文書を生み出したクムラン共同体と原始キリスト教のあり様を比較考察してみたい。

1. 死海文書——概説——

1.1 死海文書の発見・公刊と遺跡の発掘

1.1.1 発見

イスラエル建国に先立つ騒乱の渦中にあった 1946/47 年の冬（春）、ベドウィンの羊飼いが 3 つの巻物を発見したのが死海文書が世に知られるようになる始まりであった。そこで発見されたのは、イザヤ書写本、共同体の規則、ハバクク書注解であった。それらは古物商カンドーのもとへ持ち込まれた。ベドウィンたちは 1947 年初夏に同じ洞穴からさらに 4 つの巻物を発見した。創世記アポクリュフォン、イザヤ書の一部の写本、戦いの巻物、感謝の詩篇である。彼らは創世記アポクリュフォンをカンドーに、残りの 3 つを別の古物商サラヒに売却した。カンドーは手元にある 4 巻をシリア正教会の聖マルコ修道院に持ち込み、大主教はそれらを 24 ポンド（当時のレートで 100 ドル）で購入した。サラヒの購入した 3 巻はヘブライ大学のエレアザル・スケーニクに有刺鉄線越しに見せられ、それらが古代の写本であることが確認された。そこで 1947 年 11 月 29 日——国連によるイスラエル国家創設可決の日——に、スケーニクはそれら 3 巻を購入した。1948 年 2 月にシリア大主教は巻物の価値を判断するため、エルサレムのアメリカ・オリエント研究所に使いを送り、そこにいたジョン・トレヴァーに巻物を見せた。その価値に気づいたトレヴァーは巻物の写真を撮影し、その一部をウィリアム・オルブライトに送り、彼はイザヤ書写本の書体を前 2 世紀に年代づけた。ユダヤ人に売りたくなかったシリア大主教は、翌 1949 年 1 月に巻物をアメリカに持っていき買い手を探しはじめ、1954 年にウォール・ストリート・ジャーナルに広告を出す。その結果、当時米国滞在中だったスケーニクの息子イガエル・ヤディンによって——身バレしないように代理人を立てて——巻物は 25 万ドルで購入された。こうして最初に発見された 7 つの巻物はすべてユダヤ人の手に渡ることになった。

1948 年 5 月 14 日にイスラエル国が建国されるが、その翌日から第 1 次中東戦争がはじまり、死海周辺はヨルダン領に入れられる。1949 年 1 月には国連軍兵士によって第 1 洞穴が発見され、同年 2-3 月にはエルサレム・フランス聖書考古学研究所所長ドミニコ会司祭ローラン・ドゥ・ヴォーによって発掘調査が開始された。そのとき、新たな巻物と廃墟が発見され、1951 年に廃墟の発掘調査が行われ、それがクムラン共同体の居住地と同定されるにいたった。

1951-56 年にかけて、考古学者によってさらなる洞窟の探索が行われるが、ベドウィンもまたそれに先んじようと洞穴探索合戦の様を呈することになった。両者の探索の結果、11 の洞穴から巻物が発見されたが、巻物の多い 5 つの洞穴 (1, 4, 11+2, 6) をベドウィンが、出土品の少ない 6 洞穴を考古学者が発見することになった¹。

1.1.2 公刊

発見された巻物の写真つき校訂本は、まず 1950-51 年に最初の 4 巻が公刊され、1948-56 年にスケーニクの 3 巻も公刊された。1955 年に残りの第 1 洞穴の写本も公刊に至った (series Discoveries in the Judean Desert [DJD] 1)。第 2, 3, 5-10 洞穴の写本も続々と同シリーズから公刊されていった (1961, 62, 65, 68, 77, 82 年)。ところが、第 4 洞穴出土の多くは未公刊の状態が続いた。当時はヨルダン政府が

¹ 死海文書発見の経緯については、ミラー・パロウズ『死海写本』新見宏・加納政弘訳、山本書店、1961 年 (原著 1955)、11-86 頁、エドマンド・ウィルスン『死海写本—発見と論争 1947-1969—』桂田重利訳、みすず書房、1979 年 (原著 1969)、3-22 頁、E・M・クック『死海写本の謎を解く』土岐健治監訳、太田修二・湯川郁子共訳、教文館、1995 年 (原著 1994)、13-35 頁、ジェームス・C・ヴァンダーカム『死海文書のすべて』秦剛平訳、青土社、1995 年 (原著 1994)、19-40 頁、J・J・コリンズ『「死海文書」物語—どのように発見され、読まれてきたか—』山吉智久訳、教文館、2020 年 (原著 2013)、15-41 頁、H. Debel, “Discoveries,” in G. J. Brooke and Ch. Hempel (eds.), *T&T Clark Companion to the Dead Sea Scrolls*, London: T&T Clark 2019, pp. 7-16 等参照。

巻物を購入し、座長のドウ・ヴォーが国際チームを編成していたが、ヨルダン政府の圧力によりユダヤ人研究者を入れなかった。また、第4洞穴出土の写本は保存状態が悪いのにチーム人員が少なく、にもかかわらずメンバーが注解をつけたがったため公刊が大幅に遅れることになった。

1967年には第3次中東戦争があり、巻物はイスラエルが押収し、事実上の所有者となった。さらに、1971年にドウ・ヴォーが亡くなり、何人かが編集委員長の任を受け継ぐが、公刊は停滞したままであった。公刊の遅れは巻物にアクセスできない研究者からの不満を高め、国際チームへの圧力が加えられるようになっていった。1987年にハーバード大のジョン・ストラグネルが委員長となると、メンバーにユダヤ人を加えるようになった。しかし、1990年にイスラエルの日刊紙「ハ・アレツ」のインタビュー記事にストラグネルが「ユダヤ教は恐ろしい宗教である」と発言したことが掲載されると、大反響を呼び起こし、彼は委員長の地位から解任され、後任にヘブライ大学のエマニュエル・トーヴが任命される。1991年には Michael Baigent and Richard Leigh, *The Dead Sea Scrolls Deception* (マイケル・ベイジエント／リチャード・リー『死海文書の謎』高尾利数訳、柏書房、1992年) がベストセラーになり、バチカン陰謀説が流布するようになった。こうしてまだしばらくゴタゴタが続いたが、トーヴはメンバーを増やし、またデジタル技術の進展により、残りの写本断片の公刊が徐々に軌道に乗り、2001年までの10年間に DJD を 28 巻、2010 年に全 40 巻が出版されて DJD シリーズはその役を終えた²。

死海写本の発見と公刊は、イスラエル建国に伴う紛争と同時進行で進められたがゆえの困難さがあったと言えるが、また一部のクリスチャン研究者が写本を占有することによって発行が遅れる事態になってしまった。

² 公刊の遅れについては、クック、ヴァンダーカム、コリンズ（前注）参照。

1.1.3 クムラン遺跡——ドゥ・ヴォーの解釈——

クムランの遺跡を発掘したドゥ・ヴォーは、遺跡の居住時期を大きく 2 つの時期に分け（鉄器時代とヘレニズムー初期ローマ時代）、クムラン共同体の居住時期を前 2 世紀半ばから後 68 年までとした。

第 1 期：鉄器時代（前 8-7 世紀）

第 2 期：ヘレニズムー初期ローマ時代（前 2 世紀～後 1 世紀）

1a 期：ヒュルカノス 1 世時代（前 130-100 年頃）：遺物ほとんどなし

1b 期：ヤンナイオス王～初期ヘロデ時代（前 100 頃-31 年：地震）

建物（集会所、食堂、写本室）、導水管と沐浴槽（漆喰）、陶器窯

2 期：ヘロデの死～ローマ軍による破壊（前 4 年-後 68 年）

3 期：ローマ軍による使用（68-90 年頃）

ドゥ・ヴォーによれば、前 2 世紀後半に最初の集落ができ、ヤンナイオスの時代に建造物が建立されたが、前 31 年の地震によって一度はその地を離れ、ヘロデの死を契機に再びその地に戻り、対ローマ戦争でローマ軍に滅ぼされるまでそこに住み続けたという。そしてローマ軍が迫る中、いつか戻ってきたときのために彼らは巻物を洞穴の中に隠した、と。しかしながら、ドゥ・ヴォーが最終報告書を出す前に死去してしまったため、少なくとも異論が出され、またいくつかの未決の問いが残されている。特に居住開始時期については、前 1 世紀前半（前 100-50 年）に位置づける見解が出されており（J・マグネス）、それとクムラン共同体特有の文書（特に『共同体の規則』[IQS]）の成立年代との関係で問題が生じるように見える。ドゥ・ヴォーの説明を受け入れるならば、『共同体の規則』

の最古の写本（4QS^a=4Q255）の成立時期（前 125-100 年）と共同体のクムランへの居住時期にそれほどの齟齬は生まれないが、前 100 年より後の居住開始となると、『共同体の規則』はクムラン移住前にすでに書かれていたことになる。だとすると、この文書はこの誰のためのものかという問いが生じてしまう。また、クムラン遺跡の居住者がセクトメンバーであったことの確証があるわけではないので、この遺跡を別荘であったとか要塞であったとか、あるいは途中で居住者が変わったとする見解もある³。

とはいえ、考古学資料から大きな概観として次のことは言えそうである。まず、異なる洞穴から見つかった多様な文書群は、全体としてはテーマ的、イデオロギー的に一貫しているので、これらの文書群は特定の集団ないし運動に属していたと考えられる。第 2 にいくつかの洞穴（洞穴 7-9）は、クムランの建造物を通らないと辿り着けないので、これら文書群が外から持ち込まれたとする見解はありそうにない。第 3 に、エルサレムから文書を隠すためにクムラン居住地の近くの洞穴にわざわざやってきたと考えるのはありそうにない。エルサレム周辺にもエリコ周辺にも洞穴はいくらかもある。クムラン居住地から最も近い第 4 洞穴から 500 を超える最大の文書が発見されているのであるから、これらの文書が外部から持って来られたと考えるよりはクムラン居住者がそれらの洞穴を利用したと考える方が蓋然性は高い。さらに居住地と洞穴で見つかった陶器の共通性、居住地で見つかった無数のインク瓶と大量の文書の存在、清浄規定を細かく記した文書と沐浴槽の存在、これらはクムラン居住者と洞穴で見つかった巻物との密接な関係を示すと言える。

なお、建物群の東 50m からは 1100 基の墓が 3 区画に分けられているのが発見され、墓石は南北で頭部は南向きで、区画内は男性の遺骨だけがあったが、離れたところからは女性と子供の遺骨があり、

³ Dennis Mizzi, “Archaeology of Qumran,” in Brooke and Hempel (上記注 1)17-36 による。

また男女一緒の墓も発見された。ただし、遺骨の年代づけや年齢の判別はそれほど明瞭ではないので、墓地の解釈については慎重であらねばならないとされる。

1.2 死海文書の分類

1.2.1 聖書の写本

1.2.1.1 既存テキストよりはるかに古い写本

死海写本発見前の最古の聖書写本は、カイロ写本（895 年頃：預言書のみ）とアレッポ写本（925 年頃）であった。それまでに知られていた本文は、マソラ、七〇人訳、サマリア五書、古代文献内の引用であり、微妙な異同の存在は既知であった。死海文書約 800 のうち、202 写本が聖書写本と同定され（前 3 世紀～後 1 世紀の写本）、それまでよりも 1000 年以上古い写本が見つかったことになる。

死海文書内の聖書写本には、その写本の本数に大きなブレがある。詩篇 36 本、申命記 29 本、イザヤ書 21 本、出エジプト記 17 本、創世記 15 本、レビ記 13 本などである。エステル記とネヘミヤ記は発見されていない。ネヘミヤ記はエズラ記と一体と見なされていたとすればその欠落は偶然であるが、エステル記は聖典外と考えられていた可能性がある。クムラン文書にはプリム祭への言及がないからである。

1.2.1.2 テキストの異同

死海文書の聖書写本の中には、マソラとほぼ一致する写本もあるが（イザヤ書写本 [1QIs^a] 前 100 年頃）、マソラと異なり七〇人訳と（ほぼ）一致するテキストもある。

例 1：出 1:5 のエジプトに降ったヤコブの子孫の数はマソラでは「70 人」であるが、七〇人訳と 4QExod^a では「75 人」となっている。

例 2：申 32:8 のマソラテキストは「至高者が嗣業を受け継がせ、

人の子らにそれを分割した時、イスラエルの子ら (בני ישראל) の数にしたがって、諸国民の境界を定めた。」と「イスラエルの子ら」という読みを示しているが、七〇人訳は「神の御使いたち」(ἀγγέλων θεοῦ)、4QDeut^f は「神の子ら」(בני אלוהים) という読みになっている。

例 3 : エレミヤ 10:3-11 の部分は、七〇人訳と 4QJer^b ではエレ 10:3-5+9+11 となっている。

その他マソラと異なる例として、下記の点が挙げられる。

例 4 : 11QPs^a は詩 101-150 篇の順序がマソラと異なるとともに、他の賛歌が加えられている (シリア語訳聖書 151、154、155 篇)。

例 5 : テフィリンとメズザの聖書引用はマソラと異なることが多い。

これらの事例は、マソラが唯一のテキストではなかったこと、聖書テキストの固定はずっと後の事であったことを暗示する。とはいえ、これらの例は、死海文書の方が古い読みを示している可能性もあるが、マソラの方が古い可能性が排除されるわけではない。個別のケースごとに慎重に考察されるべきである。いずれにしても、非常に古い段階での多様なテキストの読みの存在は、聖書のオリジナルテキスト (原本) なるものの存在そのものへの問いを発している可能性がある。

1.2.1.3 タルグム (聖書のアラム語敷衍訳)

死海写本からは、レビ記のアラム語訳 (4Q156 : 前 2 世紀) とヨブ記のアラム語訳 (4Q157 : 後 1 世紀) が発見されている。これらはタルグムの習慣が前 2 世紀からあった証拠とすることができる。

1.3 外典・偽典の写本

1.3.1 既知の外典・偽典の原語版写本

死海文書の中からは既知の外典・偽典の原語版と見なされる写本が見つかっている。外典からは、トビト記（ヘブライ語＋アラム語）、シラ書、エレミヤの手紙（ギリシャ語）、詩 151 篇が発見された。

偽典では、まずエチオピア語訳と部分的なギリシア語訳からのみ知られていた第Ⅰエノク書のアラム語版が見つかった。その最古の写本は前 2 世紀前半であり、エノク書原本は前 3 世紀に遡ると考えられ、そうなるとエノク派（セクトのはじまり）も前 3 世紀に存在したということになる。また、エチオピア語エノク書からは知られないがマニ教（後 3 世紀）の聖典として知られていた「巨人の書」がエノク書の一部として存在していたことが明らかになった。

次に、これもエチオピア語訳で知られていたヨベル書のヘブライ語版が見つかった。死海文書には 15（ないし 16）の写本があり、聖書並みの重要性を持たれていたことがうかがえる。

他にもギリシア語版で知られていた『12 族長の遺訓』の資料だった可能性のある「レビの遺訓」（アラム語）も見つかった。これら翻訳からしか知られていなかった外典・偽典の原語テキストが発見され、原語や成立年代について再考を促す発見になっている。

1.3.2 未知の偽典——聖書の再話——

死海文書には、これまで知られていなかった聖書物語の語り直しのような文書群も見つかっている。以下はそのいくつかの例である。創世記アポクリュフオン(1Q20)、ヤコブの遺訓(4Q537)、ヨセフの遺訓(4Q539)、ケハトの遺訓(4Q542)、アムラムの幻(4Q543-549)、モーセの言葉(1Q22 他)、改訂五書(4Q158, 4Q364-367)、ヨシュア記アポクリュフオン(4Q378-379)、偽サムエル(4Q160, 6Q9)、偽エゼキエル(4Q385 他)、偽ヨベル(4Q225-228)他
これらの文書群の示唆することは、古代ユダヤ人はきわめて精力的に書物を書いていたということであり、また同時に何を聖典とする

かはまだ固定されていなかったということでもあるようだ。

1.4 未知の諸文書

1.4.1 聖書釈義

死海文書には聖書解釈の書物群も見つかっている。特定の聖書の注解には以下のようなものがある。

創世記注解(4Q252-254, 254a)、イザヤ書ペシエル(3Q4; 4Q161-165; 4Q515; 4Q176)、ホセア書ペシエル(4Q166-167)、ミカ書ペシエル(1Q14; 4Q168)、ナホム書ペシエル(4Q169)、ハバクク書ペシエル(1QpHab)、ゼファニヤ書ペシエル(1Q15; 4Q170)、マラキ書注解(4Q253a)、詩篇ペシエル(1Q16; 4Q171, 173)

これらとは異なり、聖書のいろいろな個所から言葉を引用しつつ、解説を加えていくタイプの書物群もある。以下はその例である。

フロリレギウム(4Q174)、カテナ(4Q177; 4Q178; 4Q182)、創世時代(4Q180-181)、メルキツェデク(11Q13)、テストイモニア(4Q175)、聖書年代記(4Q559)、終末釈義?(4Q183)

これらの書物は、聖書に示された預言を過去にすでに実現したものではなく、著者たちの時代に実現したこと、実現しつつあること、これから実現するだろうこととして解釈している点に特徴がある。

1.4.2 知恵文書

死海文書にはいわゆる知恵文学というジャンルに属する書物群もある。以下はその例である。

教訓(1Q26; 4Q415-418, 418a, 418c, 423)、秘義(1Q27; 4Q299-301)、知恵の教え(4Q412, 425, 294)、知恵の詩(4Q411; 4Q426)、知恵の言葉(4Q185, 4Q486, 487)、幸いなる者(4Q525)他

知恵は特定の時代に限定されない普遍性を主張する特徴を持つが、クラン共同体は基本的に終末論的である。しかし、彼らは終末論に知恵を取り込んでいったようである。

1.4.3 黙示文書

黙示文学は、まさに終末論と知恵文学の融合に由来する思想の表現形態であり、クムラン共同体も黙示文書を生み出した。以下はその例である。

新しいエルサレム(1Q32; 2Q24; 4Q554, 554a, 555; 5Q15; 11Q18)、エレミヤ・アポクリュフオン(4Q383-384 他)、偽ダニエル(4Q243-245)、ダニエル・アポクリュフオン(4Q246)、四つの王国(4Q552-553, 553a)、天使ミカエルの言葉(4Q529, 571)、正義の時(4Q215a)、新しい地(4Q475)、メシア黙示(4Q521)

1.4.4 天文文書・魔術文書

クムラン共同体は、当時のエルサレム神殿体制が用いていた太陰暦（1年354日）とは異なる太陽暦（1年364日）を用いていたようであり、天体の動きに関する文書も生み出していた。以下はその例である。

月の盈欠(4Q317)、月と十二宮(4Q318)、ホロスコープ(4Q186; 4Q561)、しるし(4Q319)、祭司暦 (4Q322-324, 324a, 324c, 328-329, 329a, 330, 324i; 4Q320-321, 321a, 325, 337, 324g, 324h; 4Q324d-f)、暦文書 (4Q326, 394)

他方で、呪詛や呪文のような文書も見つかっている。以下はその例である。

呪詛（メルキレシヤア）(4Q280; 5Q14)、賢者の詩篇(4Q510-511)、悪霊払いの詩篇(11Q11)、呪文(4Q444)、厄除けの祈り(6Q18)、呪文の儀礼(8Q5)、呪禱(4Q560)他

1.4.5 儀礼文書

クムラン共同体はセクト運動体として決まった儀礼を決まった時期に行うことを良しとしていた。そうした儀礼の手順ややり方を定

めた文書がある。

祝福の言葉(1Q28b)、ベラホート(4Q286-90)、日ごとの祈り(4Q503)、光体の言葉(4Q504, 506)、祭日の祈り(1Q34 + 34bis, 4Q507-9 + 4Q505)、典礼文書(4Q409, 4Q476-476a)、安息日供犠の歌(4Q400-407, 11Q17, Masada 1039-200)、結婚儀礼(4Q502)、浄化儀礼(4Q284; 4Q414, 4Q512)

1.4.6 詩篇

聖書とは別の感謝や嘆きの詩篇も残されている。

感謝の詩篇(1QH^{a-b}; Q427-431/471b, 432; 4Q433; 4Q433a; 4Q440; 4Q440a)、バルキ・ナフシ(4Q434-438)、外典詩篇(4Q380-381)、外典詩篇と祈り(4Q448; 11Q5-6; 4Q88)、外典哀歌(4Q179; 4Q501)、神の諸々の業(4Q392)、共同の告白(4Q393)

1.4.7 共同体規則文書

クムラン共同体が、自分たち自身で守るべき規則を定めた一連の規則文書も見つかっている。

共同体の規則(1QS; 4Q255-264; 5Q11)、ダマスコ文書(CD; 4Q266-273; 5Q12; 6Q15)、会衆規定(1Q28a; 4Q249a-i)、戦いの巻物(1Q33; 4QM^{a-f})、清潔規定(4Q274; 4Q276-277; 4Q278; 4Q279)、ハラハーA(4Q251)、ハラハー書簡(4Q394-399; 4Q313)、神殿の巻物(11Q19-21; 4Q365a; 4Q524) 他

以上、文書名をただ並べただけではあるが、実に多様な文書が書かれ、書き写され、保管されていたことがわかる。これらのうち、共同体規則文書とその他のいくつかはこれらを書き写したクムラン共同体（ヤハド）向けに書かれたものと考えられる。ただし、クムラン共同体独自の文書なのか、たんに外界に流布していた文書の写

本なのかの判断は容易でない⁴。

2. イスラエル民族アイデンティティの再確立と揺らぎ ——セクトの時代——

2.1 ユダヤ教の成立

聖書にもとづくユダヤ教成立の契機はバビロン捕囚に求められる。この出来事は、王国滅亡の理由への問いを生み、それに対して民の罪に対する神の罰という解釈を得た（申命記史書）。外国を使って自らの民を罰する神は、全諸民族を支配する神ということになる。それゆえユダヤ教は排他的唯一神教になった。捕囚末期に活動した第2イザヤにそれが初めて明言される。神が世界に唯一となれば、その神は世界を救う神であることになる。そこでユダヤ人は選民を再定義するようになる。すなわち、自分たちユダヤ民族は、諸民族に分離した人類（創 11:1-9）の再統合（創 12:3）のために唯一神たる創造神に仕える「祭司たちの王国、聖なる民族」（出 19:6）になるために選ばれたのだ、と。そしてその選民の責務とはいえば、神の与えた律法を遵守することである。

こうしてモーセ五書は神とイスラエル民族の契約、すなわち選民と律法の意味を開示する人類と民族の歴史書となり、この書物を通してユダヤ人はイスラエル民族アイデンティティを再確立したのである。シオン帰還後のユダヤ教は、神殿と五書という二つの柱と大祭司という一つの権威を確立させることになった⁵。

⁴ 死海文書の邦訳が現在刊行中であるが（2024 年末時点で全 12 巻中 8 巻発行済）、各巻の巻末に聖書外のクムラン文書の整理番号と各書名の邦訳が付されている。

⁵ モーセ五書の成立については、拙著『宗教の倒錯——ユダヤ教・イエス・原始キリスト教——』岩波書店、2008 年、15-85 頁、同『旧約聖書と新約聖書——「聖書」とはなにか——』新教出版社、2011 年、55-123 頁参照。

2.2 イスラエル民族アイデンティティの揺らぎ

前4世紀後半になると、アレクサンドロス大王の支配下に置かれ、ユダヤ人はヘレニズム文化と邂逅するが、彼の死後ディアドコイの争いに巻き込まれてしまう（前321-302年）。異国の大国が自国の所有権をめぐって自国で争うという絶望的な事態は、ユダヤ人の間に終末待望論を生み出すことになった（「墮天使の神話」=Iエノク6-11章）。

前3世紀に入り、プトレマイオス朝エジプトの支配下に入ると、（一部の）ユダヤ人（支配者層）の中からヘレニズム文化を愛好するヘレニストが出てくる。こうしてヘレニズムとの出会いは、ユダヤ人の間に「ユダヤ人」とはだれか、出生によるのか生き方が問題なのかという問いをもたらすことになった。さらに、プトレマイオス朝の支配は、暦の問題を引き起こしたようであった。当時のエルサレムは1年360日の太陽暦を導入したようであり、それとユダヤ祭日の調整の問題があった。

こうした時代背景の中から、律法遵守と1年364日の暦を主張しつつヘレニストを批判するセクト、エノク派が成立した（前3世紀。「天体の書」=Iエノク72-82章、「寝ずの番人の書」=Iエノク1-36章）。1年364日であることは、7で割り切れることから毎年同じ日が同じ曜日になることで、ユダヤ祝祭日と安息日の重なりを避けることができる。

前2世紀に入ると、セレウコス朝シリアの支配下に置かれるようになる（198年～）。アンティオコス4世エピファネスがシリア王に即位（前175-164年）すると、彼は支配領域の住民にヘレニズム化を推進した。その機に乗じて、ユダヤ人の間で大祭司職の継承争いが起きてしまう。大祭司職は伝統的には正統なツァドク家の終身世襲制であったが、この時の継承争いで正統な大祭司だったオニアス3世は暗殺され、ツァドク家の終身世襲制は終わりを告げることになる。このユダヤ内乱を利用しようとエピファネス王はユダヤ教

を弾圧し、これに抵抗するハスモン家を中心としたマカバイ戦争が起こる（前 167-157 年）。最終的にはシリアはハスモン家と講和し、ハスモン家のヨナタンを大祭司職に任命する（前 152 年）。

こうした時代に、いわゆるユダヤ教の主要 3 セクト——サドカイ派、ファリサイ派、エッセネ派——が成立したとされている

ヨセフス『古代誌』13:171「そのころ（ヨナタンの時代〔前 152-142 年〕）ユダヤ人のあいだには人間の事柄について異なる見解をもつ三つの派があった。それはファリサイ派とサドカイ派、三つ目はエッセネ派と呼ばれていた。」（私訳）

ここに登場するエッセネ派（の一部）がクムラン共同体ではないかと考えられており、かつ彼らはエノク派の流れを汲んでいる可能性がある⁶。クムラン共同体は、エノク派と同じ暦を採用し、また第 I エノク書のいくつもの写本を書き残している。

ハスモン家は、祭司の家系ではあるもののモディインというユダヤ地方のはずれに位置する田舎出身者であり、正統な大祭司の家系ではなかったが、大祭司のみならず前 103 年以降は「王」をも名乗るようになった。ユダヤ人にとって正統な王の家系はダビデ家であり、ハスモン家はどちらの地位についても血統が合わなかった。そのことは、大祭司と王の権威を失墜させることに繋がった。主要 3 セクトの成立には、こうした大祭司の正統性の問題がかかわっていた。

前 1 世紀に入ると、ハスモン家兄弟間で王位継承争いがおこり（前 76-63 年）、そこにローマの介入を許してしまい、独立王朝を失ってローマの支配下に入れられてしまう（前 63 年～）。ローマを味方にした兄の陣営とパルティアを後ろ盾にした弟側の戦いが続いたが、前 2 世紀にユダヤ教に強制改宗させられたイドゥメア人たち

⁶ クムラン共同体とエッセネ派の同定については、拙稿「クムランと死海文書——神殿時代末期のユダヤ社会の同時代史的視点から——」『ユダヤ・イスラエル研究』33（2019.12）13-25 頁参照。

の指導者アンティパトロスが実権を握るようになり、やがてその息子であるヘロデが台頭してくる。エルサレムがパルティアに支援を受けたハスモン家の弟の息子によって奪われると、ローマ元老院はヘロデを「ユダヤ人の王」として承認し、ヘロデは自分がこれから統治することになるユダヤ地方を自らの手で征服していくことになった（前 40-37 年）。ハスモン家の王を倒してユダヤ全土を支配下におさめたヘロデ大王ではあったが、まさに彼が王であることが王の権威をさらに失墜させることになった。イドゥメア出身の半ユダヤ人には血統上の正統性は完全に欠けていた。また、ヘロデは自分の都合で大祭司を次々に交代していった。終身制、世襲制という血縁に意味のあった大祭司は、今やヘロデ家の——後にはローマ総督の——傀儡と化してしまい、その権威は地に堕ちた。

現実の王や大祭司に正統性がないがゆえに、ユダヤ人の中には正統な大祭司、正統な王の登場が待ち望まれるようになる。こうして前 1 世紀の終わりから後 2 世紀の初めにかけて、ユダヤ人の中にはメシア待望論が花開くようになる。

以上、民族アイデンティティを確立するはずのモーセ五書が生み出され、その正統な解釈者としての大祭司がいたユダヤ教は、強大な異国の支配下におかれるとともに大祭司の権威が失墜するという事態に陥ってしまった。こうした時代だったからこそ、多様なセクト運動が展開するようになったのであり、それらはそれぞれ独自に聖書を解釈し、それを正当化していた。こうしたセクト運動が終焉するのは、3 度にわたる対ローマ戦争の敗戦を経てからのことである（後 66-135 年）。最後のバル・コホバの乱敗戦後、ユダヤ教は徐々にラビ・ユダヤ教へと収斂し、ユダヤ人アイデンティティを再確立していくことになる⁷。

2.3 まとめ

⁷ 第 2 神殿時代のユダヤ史については、『宗教の倒錯』（前注）89-149 頁参照。

前3世紀のヘレニズム時代から後2世紀の対ローマ戦争敗戦までのおよそ300～400年の間、ユダヤ人は多様なセクトの時代を過ごすこととなった。キリスト教とその他のいくつかのセクト以外は、後2世紀以降ほぼ消滅し、ラビ・ユダヤ教へと包摂されていく。

3. クムラン共同体と原始キリスト教

3.1 生活実践

3.1.1 入会儀礼としての洗礼の意味づけ

- ・Q ルカ 3:16／マタイ 3:11「私（洗礼者ヨハネ）はあなたがたに水で洗礼を受けているが、私よりも力のある方が来られる。私は、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたがたに洗礼をお授けになる。」（協会共同訳）
- ・使徒言行録 1:5「ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがた（クリスチャン）は間もなく聖霊によって洗礼を受けるからである。」
- ・II コリント 13:13「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にありますように。」
- ・『共同体の規則』III.7-9「そして彼（入会者）はかれの真実にある共同体に(下された)聖霊によって、その諸々の咎すべてから浄くなり、8 正しさと謙遜との霊によってその罪があがなわれ、神の諸々の掟すべてに対するその魂の謙遜によってその肉が浄くなり、9 不浄を祓う水を振り掛けられ、清浄の水によって聖くなるのである。」（ぷねうま訳）

洗礼者ヨハネは「聖霊」による洗礼を最後の審判と関連づけているが、キリスト教とクムラン共同体はそれぞれのグループへの入会（および年ごとの契約更新）と（も）関連づけている。ただし、キリスト教の洗礼は入会時の1回のみであり、それは洗礼者ヨハネからの継承と考えられるのに対し、クムラン共同体は入会儀礼としてだけではなく、浄めの必要な際には沐浴を繰り返したようである。

いずれにしても、「聖霊」はすでにその共同体に下されていると考える点でキリスト教とクムラン共同体は近似している。その点で洗礼者ヨハネよりもキリスト教の方がクムラン共同体の洗礼理解に近いと言えるが、おそらくそれは終末理解の近さに起因する（後述）。

3.1.2 非婚

- ・マタイ 19:12「独身者に生まれついた者もいれば、人から独身者にされた者もあり、天の国のために自ら進んで独身者となった者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい。」
- ・Iコリント 7:1-7「さて、そちらから書いてよこしたことについて言えば、男は女に触れないほうがよい。2 しかし、淫らな行いを避けるために、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。……7 私としては、皆が私のようであってほしい。しかし、人はそれぞれ神から賜物をいただいているので、人によって生き方が違います。」
- ・ヨセフス『ユダヤ戦記』1:120-121「彼ら（エッセネ派）は結婚を重く見ず、他人の子を、まだすなおでたわめやすいうちに養子とし、自分の血族のように扱い、自分たちの生き方や風習を心にうえつける。これは彼らが結婚を廃して種族の保存をすててしまうためではなく、婦人の淫奔な生き方から身を守るためであり、女という者は、決して、一人の男性に貞節をつくすものではないと信じていたからである。」（秦訳）
- ・プリニウス『博物誌』15V「死海の西側だが沿岸の毒気地帯の外部に孤独な種族エッセネ族がいる。これは全世界の他のすべての種族以上に珍しい種類である。というのはかれらは婦人というものをもたず、すべての性欲を絶ち、金銭をもたず、ただ椰子の木のみを友としている。」（中野訳）

- ・『ダマスコ文書』VII.6-8「そしてもし、彼らがこの地の規則に従って陣営に住み、7 妻を娶り、子供をもうけるならば、彼らは律法の言葉に従って歩まなければならない……。」

ヨセフスとプリニウスによれば、エッセネ派は非婚を良しとしていたようである。ダマスコ文書は「この地の規則に従って」結婚する者に言及しているので、結婚しない者の存在を前提にしている。キリスト教（マタイおよびパウロにとって）の理想は、クムラン共同体のように非婚である（性交しない）ことにあった。

3.1.3 財産共有制

- ・使徒言行録 2:44-45「信じた者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売っては、必要に応じて、皆がそれを分け合った。」
- ・ヨセフス『ユダヤ古代誌』18:20「彼らはそれぞれの財産を同志と共有する。したがって、富者といえど無一物の人以上にその所有する財産から恩恵を受けるということはない。」（上記、プリニウス参照）
- ・『共同体の規則』I.11-13「そしてかれの真実に志願する者たちすべては、自分たちの知識と力と 12 財産すべてを神の共同体にもたらし、神の諸々の掟の真実によって自分たちの知識をきよめ、かれの諸々の道の完全さのとおり自分たちの力を正し、13 かれの義の計画のとおり自分たちの全財産を(正す)。」

ヨセフスによれば、エッセネ派は財産共有制を実践していた。これについては、『共同体の規則』においてクムラン共同体がそうしたルールを持っていたらしいことが確認できる。財産共有制は初期キリスト教にとっての理想であり、クムラン共同体はそれを実践していたのである。

3.1.4 律法に対する態度

- ・ガラテヤ 2:11-14「……というのも、ケファは、ヤコブから遣わされた人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに、その人々が来ると、割礼を受けている者たちを恐れ、異邦人から次第に身を引き、離れて行ったからです。……私は皆の前でケファに言いました。「あなたは自分がユダヤ人でありながら、ユダヤ人のように生活しないで、異邦人のように生活しているのに、どうして異邦人にユダヤ人のようになることを強いるのですか。」」

ユダヤ人キリスト教徒は、律法を（完璧には）守らず、異邦人キリスト教徒と共同の食事をしていたが、クムラン共同体には考えられないことであつたに違いない。

3.1.5 まとめ

洗礼の意味づけにはキリスト教とクムラン共同体に類似点は見られるが、1 回限りという点では洗礼者ヨハネからの継承と考えられる。クムラン共同体とキリスト教との類似性は終末理解の類似性由来する。非婚（ないし性交の忌避）は「産めよ、増えよ、地に満ちよ」（創 1:28、9:1）を掟と捉えるユダヤ教においては珍しいとする見解もあるが、終末意識の強い集団にあつては禁欲主義的傾向は不思議でない。財産共有制も珍しいと言えるが、禁欲主義が所有放棄を理念とし、また緊密な共同体形成を志向する集団にあつてはそれを理想とすることはありえないことではないだろう。キリスト教とクムラン共同体の決定的な違いは、律法に対する態度に確認できる。クムラン共同体がユダヤ人だけを対象にしているのに対し、キリスト教は異邦人信者の獲得に舵を切ったこと、もともとイエスが形式的な律法遵守主義に関心を示さなかったことに起因するだろう。

以上、原始キリスト教内にエッセネ派からの何らかの影響・接触のあつた可能性は否定できないが、直接的な影響を想定するよりは、

当時のユダヤ社会にあった一つの大きな潮流（エッセネ派もその潮流の形成に影響を与えた）の中からキリスト教が生まれてきたと考える方が妥当であると言えよう。

3.2 用語上の類比

3.2.1 「敵を憎め」

- ・マタイ 5:43 「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と言われている。しかし、私は言うておく。敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」
 - ・『共同体の規則』 1.9-10 「そして光の子らすべてを、それぞれ 10 神の会議におけるその籤に応じて愛し、闇の子らすべてを、それぞれ神の復讐（の時）におけるその罪責に応じて憎むこと。」
- 「敵を憎め」という掟はヘブライ語聖書にもラビ文献にも存在しないが、クムラン共同体には共同体外部にいる「闇の子ら」を憎むことが命じられている。マタイのテキストにおけるイエスは、クムランのテキストの命令内容を逆転させている。
- ・I コリント 16:22 「主を愛さない者は、呪われよ（アナテマ）。

主よ、来りませ（マラナ・タ）。」

ただし、原始キリスト教にも呪いの言葉（破門）はあり、それは終末論と結合させられている。いわゆる最後の審判時に神によって裁かれることが期待されている。

3.2.2 「光の子」と「闇の子」、「ベリアル」

- ・ルカ 16:8 「この世の子らは光の子らよりも、自分の仲間に対して賢く振舞っているからだ。」
- ・ヨハネ 12:36 「光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」
- ・I テサロニケ 5:5 「あなたがたは皆、光の子、昼の子だからです。私たちは、夜にも闇にも属していません。」

- ・エフェソ 5:8 「あなたがたは、以前は闇でしたが、今は主にあつて光となっています。光の子として歩みなさい。」
- ・ヨハネ 17:12 「私が保護したので、滅びの子のほかは、誰も滅びませんでした。」
- ・エフェソ 2:2 「かつては罪の中で、この世の神ならぬ神に従つて歩んでいました。空中に勢力を持つ者、すなわち、不従順の子らに今も働く霊に従つて歩んでいたのです。」
- ・II コリント 6:15 「キリストとベリアルとにどんな調和がありますか。信者と不信者とにどんな関係がありますか。」
- ・『戦いの巻物』(1QM) I.1 「光の子らの手出しの最初は、闇の子らの籤に対して始められる、(すなわち、) ベリアルの軍団に」

新約聖書には光と闇が頻繁に対比されており、その点ではクムラン共同体文書と非常によく似た性質を持っている。こうした表現は、終末論と結合した二元論的世界観の反映なのであり、そこには両集団の終末意識の近接さが表れていると言えよう（後述）。

3.2.3 「貧しい人たち」

- ・ガラテヤ 2:10 「ただ、私たちがこれからも貧しい人たち (τῶν πτωχῶν) を顧みるようにとのことでしたが、私はこのことのためにも大いに努めてきたのです。」(ロマ 15:26 参照)
- ・『戦いの巻物』(1QM) XI.7-9 「そしてあなたの油注がれた者たち 8……中略……の手によって、あなたの諸手の諸々の戦いの[諸時]代をあなたはわれらに告げた。(それは)われらの敵たちに栄光を顕し、ベリアルの諸軍隊、七つの 9 空しい諸国民を貧しい者たち (אֲבִיּוֹנִים) の手によって倒すためである。」(1QM XI.13, XIII.14; 1QH^a X.34, XI.26, XIII.18, 20, 24; CD VI.21, XIV.14; 1QSb V.21; 1QpHab XII.3, 6, 10 参照)

ガラテヤ書のいう「貧しい人たち」とは貧者一般ではなく、エルサ

レム教会のことを指していると考えられ、原始エルサレム教会もクムラン共同体も「貧しい者たち」と呼ばれている。これは、文字どおりの意味でもあったろうが、それだけではないある種の自意識の表現でもあったように見える。ユダヤ人キリスト教の一派に「エビオン派」がいたことが知られているが、「貧しい者たち」という表現には肯定的な意味合いもあった。

3.3 メシア論

3.3.1 メシア

- ・ルカ 4:24 「よく言うておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。」
- ・ロマ 1:3-4 「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば死者の中からの復活によって力ある神の子と定められました。この方が、私たちの主イエス・キリストです。」
- ・ヘブライ 4:14 「さて、私たちには、もろもろの天を通して来られた偉大な大祭司、神の子イエスがおられるのですから、信仰の告白をしっかりと保とうではありませんか。」
- ・『共同体の規則』IX.11 「預言者およびアロンとイスラエルとのメシアたちが来るまでは。」

クムラン共同体では複数のメシア的存在——預言者、アロンのメシア＝祭司系メシア、イスラエルのメシア＝ダビデ系メシア——が想定されているが、キリスト教はすべてのメシア称号をイエスに集中させている。

3.3.2 メルキツェデク

- ・創 14:18 「また、サレムの王メルキゼデクがパンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。」
- ・詩 110:4 「あなたは、メルキゼデクに連なる／とこしえの祭

司。』

ヘブライ語聖書には「メルキツェデク」（直訳は「わが王は義」）なる者が言及されるが、正体不明の存在である。しかし、この人物は新約聖書およびクラン文書において、一定の役割を果たしている。

- ・ヘブライ書 5:5-10 「同じようにキリストも、大祭司となるという栄誉をご自分で得たのではなく、こう言われた方がお与えになったのです。／「あなたは私の子／私は今日、あなたを生んだ。」（詩 2:7）／6 また、他の箇所でも、こう言われています。／「あなたこそ永遠に／メルキゼデクに連なる祭司である。」（詩 110:4）……8 キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみを通して従順を学ばれました。9 そして、完全な者とされ、ご自分に従うすべての人々にとって、永遠の救いの源となり、10 神によって、メルキゼデクに連なる大祭司と呼ばれたのです。」

ヘブライ書においてイエスはメルキツェデクの系統の大祭司（レビの系統ではない＝ヘブ7章）として言及される。

- ・『メルキツェデク』（11Q13）第Ⅱ欄（断片一＋二i＋三i＋四）
8-25 「そのときすべての[光]の子ら[と]メル[キ]ツェデクの籤の人[々]に対してあがないがなされる。[……彼]らに対して[……]彼らのす[べての行]いに応じ[て……]なぜなら、9 それはメルキツェデクと神の聖なる者たちの[民たる彼の]軍、裁きの統治の恵みの年の時期であり、10 彼についてダビデの諸詩歌に書かれているとおりである。すなわち彼（ダビデ）は言った、「神（エロヒーム＝メルキツェデク）は[神（エル＝ヤハウエ）の]会[衆]の中に[立]ち、神々（エロヒーム＝天使たち）のただ中で裁く」（詩 82:1）。また彼について彼（ダビデ）は言っ[た、「そしてその]上の 11 高みに戻り給え。神が諸民を裁くのだ」（詩

7:8-9)。また彼が、「いつまでお前」たちは不義に裁き、邪惡な者[た]ちの顔を挙げ[る]のか。[セ]ラ」（詩 82:2）と言[った]ことについて、12 その解釈は、ベリアルと彼の籤の靈たちに関わる。彼らは[……………]神の諸々の掟からそれ、[邪惡を行う]。13 そしてメルキツエデクが[神]の諸裁きの復讐を果たし、[そしてその日には彼は]ベリアル[の手]と[彼の籤の靈たち]すべての手から[彼らを救出する]。14[義]の神々すべては彼の助けとなり、[そして彼]は[……………]神の子らすべて、そして[……………]15 それは[平和]の日であり、それについて彼は[……]預言者[イザ]ヤ[をとおして]言[った]。すなわち、彼（イザヤ）は言[った]、「何と」美しいことか、16 山々の上にあつて平和を[告]げ聞かせる使[者]の[両]足は。[救]い[を]告げ聞かせるよい(知らせ)の[使[者]]は、シオンに向かつて『あなたの神は[王となった]』と言[う]」（イザ 52:7）。17 その解釈。「山々」、それらは[預言者た[ちの]ことであり]、彼らは[……………]すべてに[……………]18 そして「使者」、彼[は]靈の油注がれた者であり、ダニ[エル]が[彼について]「君主たる油注がれた者まで七週」（ダニ 9:25）と言[った]とおりである。[そして 19「救いを」告げ聞かせ[る]よい(知らせ)の[使[者]]、彼は彼について「[……………]20[嘆く者たちを]慰め[る]こと」と書かれている。……中略 23……「[シ]オン」、そ[れ]は 24 義の子らすべての会衆のことであり、彼らは[契約を起てる者[たち]、民の道[を]歩むことからそれる者たちである。そして「あなたの神」、彼は 25 ベリアルの手[から彼らを救出]する[メルキツエデク]……である。】」

死海文書においてメルキツエデクは、終末時にベリアルを倒し、「光の子ら」（クムラン共同体）をあがない、救う「神」とされている。メルキツエデクと「油注がれた者」は別人と考えられているようだが、一緒に言及されている。本文書に描かれるメルキツエデクの姿は、ヘブライ書がイエスをメルキツエデク系大祭司と同定し

た思想的背景に位置づけられよう。

古代ユダヤ教におけるメシア待望論はとりわけローマ時代に入ってから顕著になる（前 1 世紀後半～後 2 世紀初頭）。それは異国支配という現実が目の前にあり、現実の王、大祭司の正統性が欠如している中で終末待望論が高まったことを背景としているのだが、それこそがキリスト教誕生の時代背景なのであったと言えよう。

3.4 終末論

3.4.1 「この悪の世」

- ・ガラテヤ 1:4 「キリストは私たちの父なる神の御心に従って、今の悪の世から（ἐκ τοῦ αἰῶνος τοῦ ἐνεστώτος πονηροῦ）私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身を献げてくださったのです。」
- ・I エノク 48:7 「この暴虐の世」（‘ālam za ‘amaḏā）（村岡訳）
- ・ダマスコ文書 VI.10 「邪悪な時代」（קץ הרשעה : CD VI.14, XII.23, XV.7, 10; 1QpHab V.7; 4Q215a 1.ii.4; 4Q301 3a-b.8; 4Q509 205.2）
- ・ナラティブ C (4Q462) 1.10 「闇の時代」（קץ החושך）

パウロもエノク派もクムラン共同体も、自分たちの生きている「この世」「今の時代」を「悪」「闇」と見なしており、それが終末待望の理由となっている。

3.4.2 現在終末論

- ・ヨハネ 3:18-19 「御子を信じる者は裁かれない。信じない者はすでに裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。19 光が世に來たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇を愛した。それが、もう裁きになっている。」
- ・ヨハネ 16:33 「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私はすでに世に勝っている。」

よく知られているように、キリスト教の終末論には、現在終末論（すでに）と未来終末論（まだ）の緊張関係がある。これは、過去としてのキリストの出来事——キリストの死と復活——が終末の始まりと信じられたが、しかし終末の完成である未来としての最後の審判はまだ来ていないという事態に起因する。こうした事態において、ヨハネ福音書は未来のこと（最後の審判）を現在の決定事項（すでに）として語るのである。

- ・『感謝の詩篇』XI.20-24「(余白) 私はあなたに感謝する、主よ。なぜなら、あなたはわが魂を墓穴から贖い(פְּדִיתָהּ)、奈落の冥府から 21 永遠の高みへと私を挙げられた(הֶעֱלִיתָנִי)から。……22 そしてあなたは歪んだ霊を大いなる背きから浄めた(טָהַרְתָּהּ)、彼が聖者たちの軍勢 22 と共なる地位を固め、23 天の子らの会衆と共なる共同体に入るために。そしてあなたは人に知識の霊たちと共なる永遠の籤を投げた(וּתְּפִלֵּי)」、24 歓呼する共同体においてあなたの名を讃え、あなたの諸業すべての前であなたの不思議を物語るために。」(私訳)

クムラン共同体においても、かつては「墓穴」「奈落の冥府」にいたが、そこから贖われ、「永遠の高みへと」すでに「挙げられた」(完了形)という認識が表現されている。クムラン共同体への入会は、「永遠の高みに挙げられ」、「聖者たちの軍勢と共なる地位」を得、「天の子らの会衆と共なる共同体に入る」ことを意味する。この共同体の外の世界は、「墓穴」にして「冥府」なのであり、詩人はすでに天におり、肉体の死後もその靈魂は永遠に天にあり、すでに永遠の生命に与っているというのである。

- ・『感謝の詩篇』XIX.13-17「(余白)あなたの栄光のために、あなたはひとを背きから浄めた(טָהַרְתָּהּ)。(それは、)14 あなたに対して、あらゆる不浄の忌むべきことと不実の罪責から自らを聖

別するため、あなたの眞実の子らと共に、またあなたの聖者たちと共にる籤において共同体となるため、15 死者たちの蛆虫を塵から[あなたの眞実]の評議会へと、また歪んだ霊から[あなたの]英知へと高めるため……」

「死者たちの蛆虫を塵から[あなたの眞実]の評議会へと……高めるため」(15 行)という表現は、肉体の復活を暗示しているかのようにも読めるが、完了形で「浄めた」(13 行)と言われているので、終末時の復活ではなく、「塵」のなかの「死者たちの蛆虫」となっている俗世間からクムラン共同体に入り天へと高められたことが語られている。すなわち、ここでは復活のイメージは比喻として用いられているに過ぎない。未来の「裁き」であるベリアル^{ベリアル}の破滅は前提とされており(XI 26-36)、詩人は「すでに」命に与っているというのである、ベリアルは「まだ」滅ぼされていないにもかかわらず。ここにも、ヨハネ福音書と類似の詩人の「すでに」(現在終末論)と「まだ」(未来終末論)の緊張があると言えよう。

3.4.3 セクト体質

- ・I コリント 6:2 「あなたがたは知らないのですか。聖なる者たち(oι ἅγιοι) が世を裁くのです。」
- ・マルコ 13:27 「その時、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、選ばれた者たち(τοὺς ἐκλεκτοὺς) を四方から呼び集める。」
- ・『戦いの巻物』VI.6 「そして王権はイスラエルの神のものとなり、そしてかれの民の聖なる者たちによってかれは強力を為す。」(1QM IX 8, X 10, XII 1, 7, XVI 1; 1QS V.20; 1QSb I.5; I エノク 1:3; 5:7-8; 25:5; 38:2-5; 39:4-7; 45:1, 3, 5, 48:1; 4, 7, 9; 50:1; 51:2, 5, 58:1-3; 61:4, 13; 62:8, 10-13, 15, 70:3; ソロ詩 12:4; 13:12; 17:16, 26 参照)

初期キリスト教会は、クムラン共同体と同様に、自分たちを「聖な

る者たち」「選ばれた者たち」と自任するセクト体質を有していた。

- ・ユスティノス『トリュフォンとの対話』135:3「キリストがイスラエルでありヤコブであるのだから、キリストの腹から切り出されたわれわれは、なおさら真のイスラエルの族なのだ
(Ἰσραηλιτικὸν τὸ ἀληθινὸν ἔσμεν γένος) 」

- ・会衆規定(1QSa) I 1-3「そしてこれは、日々の終わりににおけるイスラエルの全会衆のための規則である。そのとき、彼らは集まって[共同体となり]、民の道[を歩むことからそ]れた祭司たちであるツァドクの子らと彼らの契約のひとたちの法規に従って[歩]む。彼らはかれの会議のひとたちであって、[地のためにあ]がなうため、邪惡のただ中でかれの契約を守ってきたのである。」

クムラン文書に頻出する「日々の終わりに」という表現は、彼らの抱いていた間近な終末意識を表している。彼らは「民の道[を歩むことからそ]れた」「イスラエルの全会衆」を自負するのであるが、それは自分たちだけが「(真の) イスラエル」なのだという自意識の表れなのであり、クムラン共同体とキリスト教に共通するセクト主義体質を示している。

- ・II コリント 5:1「私たちの地上の住まいである幕屋は壊れても、神から与えられる建物があることを、私たちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住まいです。」
- ・マタイ 16:19「私はあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上で結ぶことは、天でも結ばれ、地上で解くことは、天でも解かれる。」
- ・『共同体の規則』XI.7-8「神が選んだ者には、かれはそれら(知恵や栄光)を永遠の所有として与え、彼らに聖なる者たち(=天使)の籤を嗣{が}せ、8 彼らの評議會を天の子ら(天使)と結び合わせて共同体の会議とし、また在ろう各時代に

おける永遠の植栽のための聖なる建物の基とした。」

クムラン共同体と初期キリスト教会には、自分たちを天に属する者と考えるセクトの過剰な自意識があった。そこには終末論の前提としての二元論的世界観——裁きと救済——があった。二元論的世界観は、「今の悪の世」と「(救済としての) 来るべき世」という二元論的歴史観と、救われる「義人」と滅ぼされる「罪人」という二元論的人間観を組み合わせで出来上がっている。この二元論的世界観こそが、「罪人」(異教徒、ユダヤ教徒)に対するこの世におけるその後のキリスト教会による暴力を正当化する根拠となっている⁸。

3.5 まとめ

かつては知られていなかった新約のみに出てくる表現のいくつかが死海文書に見出された。このことは、そうした未知の表現がキリスト教独自の表現ではなく、当時のユダヤ教から出てきたものであることを証した。また、聖書を自由に引用して物語や議論を展開する新約の聖書利用法は、死海文書からも確認できる。聖書預言の成就というキリスト教のイエス理解もまた、聖書解釈のあり方として先例があったし、キリスト教独自と思われていたメシア論も、キリスト教以前に類似の考えがあったことが明らかになった。キリスト教の独自性は、贖罪死のイエス＝メシアというイエスの死にまつわる理解と、それゆえにメシア論をイエスに集中させたところにあると言えよう。

クムラン共同体と初期キリスト教には、現在終末論と未来終末論の緊張という時間理解についても共通性があった。それは強い終末意識(救いの確信)と終末遅延の問題でもあった。しかしながら、

⁸ クムランのセクト主義については、拙稿『地のために贖う』(1QS 8.6)——クムラン共同体のセクト主義——『旧約学研究』5号(2008年)77-92頁参照。キリスト教のセクト体質の起源と終末論については、拙著『終末の起源——二つの系譜 創造論と終末論——』ぷねうま舎、2021年参照。

救いを自分たちメンバーに限定し、自分たちを「選ばれた者」「聖なる者」、天に属する者とする共同体の自己理解にこの時代特有のセクト体質が現れていると言わねばならない。クムラン共同体もキリスト教も、異邦人に対する以上に自分たちを受け入れないユダヤ人（および「異端」）に対する憎悪が強い。「真のイスラエル」という自意識こそが、キリスト教の抱える反ユダヤ主義の根源なのである。

おわりに

キリスト教は世界で最大の信者数を抱えるという点で「世界宗教」であるには違いない。しかし、他宗教との共存、とりわけ反ユダヤ主義（およびイスラモフォビア）の克服という課題は、自覚されているけれども実現にはまだ遠いように見える——カトリックは第2バチカン公会議で他宗教との共存を明記したが、プロテスタントは宗派ごとに異なる。これこそが現在のユダヤ系イスラエル人の抱える世界に対する不信感の根源なのであり、それは弱者への暴力を正当化し、ガザの悲劇を生み出している。

ここにはキリスト教の抱える二元論的世界観にもとづくセクト体質という問題があるように思われるが、これが死海文書から見えてくるキリスト教の問題の本質であると言わねばならない。二元論の問題は、救済と滅びがセットになっていることにある。しかし、自分が救われるのに他者の滅びは必要なのだろうか⁹。

他宗教、特にユダヤ教を否定することで自己の正当性を示そうとすることは、却ってキリスト教の存在価値を貶めるのではなかろうか。キリスト教には、他宗教徒であれ無宗教者であれ、だれに対しても訴えることのできる——その意味で＜普遍的な＞——使信が

⁹ 「永遠の生命」というキリスト教の救済論に内包される問題については、拙稿「古代ユダヤ思想における終末論と創造論——死後の生をめぐる思弁を中心に——」『聖書学論集』54（2023）143-170 頁参照。

あるのではないだろうか¹⁰。一方で先進国においてクリスチャン人口が激減し、他方でまたもや戦争の時代に突入している世界において、キリスト教にはまだやるべき課題があるのではないだろうか。世界をまっとうな方向に向けるため、キリスト教は自らも変わって行かねばならないのではないだろうか。

以上の問いかけをもって本稿を閉じたい。

参考文献

- 上村 静『キリスト教信仰の成立——ユダヤ教からの分離とその諸問題——』fad叢書4：関東神学ゼミナール、2007年
- 同『宗教の倒錯——ユダヤ教・イエス・キリスト教——』岩波書店、2008年
- 同『旧約聖書と新約聖書——「聖書」とは何か——』シリーズ神学への船出3：新教出版社、2011年
- 同『終末の起源——二つの系譜 創造論と終末論——』ぷねうま舎、2021年
- 同『『地のために贖う』(IQS 8.6) ——クムラン共同体のセクト主義——』『旧約学研究』5号(2008年) 77-92頁
- 同「クムランと死海文書——神殿時代末期のユダヤ社会の同時代史的視点から——」『ユダヤ・イスラエル研究』33(2019.12) 13-25頁
- 同「古代ユダヤ思想における終末論と創造論——死後の生をめぐる思弁を中心に——」『聖書学論集』54(2023) 143-170頁
- 死海文書翻訳委員会訳『死海文書 I 共同体の規則・終末規定』ぷねうま舎、2020年
- 同『死海文書 II 清潔規定・ハラハー・神殿の巻物』ぷねうま舎、

¹⁰ キリスト教が真に「普遍的な」宗教になるために必要と思われることについて、拙著『キリスト教信仰の成立——ユダヤ教からの分離とその諸問題——』fad 叢書4：関東神学ゼミナール、2007年参照。

2023年

- 同『死海文書 III 聖書釈義』ふねうま舎、2021年
同『死海文書 VI 聖書の再話 1』ふねうま舎、2018年
同『死海文書 VII 聖書の再話 2』ふねうま舎、2019年
同『死海文書 VIII 詩篇』ふねうま舎、2018年
同『死海文書 IX 儀礼文書』ふねうま舎、2018年
同『死海文書 X 知恵文書』ふねうま舎、2019年